

お忙しくても、約2分間で読めます

山内公認会計士事務所

ハートフル・ワード (心からの言葉)

TEL 098-868-6895
FAX 098-863-1495

経営者への活きた言葉

困難の中に運がある 永守 重信 (日本電産会長)

- 21年8月に買収した赤字続きの三菱重工工作機械(現日本電産マシンツール)は、買収2カ月目で黒字化した。当たり前のことを当たり前にやっているだけだ。ある大企業は経営不振でも部長はグリーン車で出張し、タクシーチケットを毎月3冊もらっていた。まずそこを切らないといけない。日本電産はリーマンショック到来時にまだ数百億円の利益を上げていたが、上場企業で最初に賃金をカットした。そして、真っ先に利益を回復させ、賃金カット分を後から利息を付けて従業員に返した。
- 「運が7割」が持論だが、この話をするとう「人生は運」という人が出るが、7割の運に近づくのに絶壁がある。死ぬほど働かないと運はこない。逆に3割ものすごく努力すればチャンスが次々くる。だから困難に近づかないといけない。困難の中に運がある。世の中はいいことと悪いことが差し引きゼロだ。私のように波瀾万丈な人生は、ものすごくいいこともあれば、死ぬほど苦しいこともある。
- 毎日困難がある。次の売り上げ100兆円を目指す、コロナ禍など問題はやってくる。ただ「足元悲観、将来楽観」と明るい先があると思っやらないといけない。私が京都先端科学大学を運営するようになったのは、10年先の人材を自ら育てていきたいと思ったからだ。人間としての総合的な知性と感性の豊かさをしめすEQ(感情指数)を高める教育を目指している。心の豊かさや人間力は勉強以外のことをやらないと身に付かない。

(参考:「週刊東洋経済」2021年12月25日・2022年1月10日号)

経営者のための理念・哲学

渋沢栄一名語録

- 「一步一步」…およそ世の中の事は、一歩進んで立ち戻り、而して、また進むというように、波動状をなして進んで止まぬものである。
- 「開運の道」…窮すればすなわち通ずという格言がある。人はいかに窮迫に会っても、至誠と勉強に欠けるところがなければ、必ず開運の道があるものである。
- 「立志とは」…立志とは、一生を有意義に終るよう、あらかじめ志を決定することである。
- 「真正の富」…経済事業は、すべて富を得るをもって目的とするものであるが、われも富み人も富み、而して国家の進歩発達を助ける富にして、はじめて、真正の富と言い得るのである。
- 「その日の事はその日に」…人びととその日の事は、必ずその日に済ませ。後日に事の残らぬよう努むべきである。

(参考:「致知」:2022年3月号)

経営者のための危機管理

昭和的な加工貿易立国モデルと決別を

富山和彦(経営共創基盤グループ会長)

- 日本は2連敗中です。「グローバル革命」と「デジタル革命」という2つの不連続な変化に対して、今のところ負け組みです。違うタイプの不連続な大変化(脱炭素)が起きてくれたのは、巻き返すチャンスが到来したということです。環境やエネルギーの技術が発達した日本には比較優位があります。ただし、昭和的な大量生産を前提として加工貿易立国モデルにしがみついたら、3連敗の大負けになります。エネルギー消費型の産業形態になりますし、何よりもうからない。このままでは日本の平均年収4万ドルの賃金水準は維持できません。
- 規模を追うのではなく、事業の収益性に軸足を置いて、潤沢な利益を使って技術を磨き、投資をしていくというモデルに転換する。欧州企業に多いですが、日本では京都には結構そういう企業があります。

(参考:「日経ビジネス」2022年1月10日号)

古典に学ぶ

数千年前からの大原則

(解説) この国産奨励の宣伝とも極端な消極主義、排外主義と取られては、独り発起人等の迷惑なるのみならず、ひいては国家の大損失を招く恐れがある。有無相通ずとは数千年前から道破された経済上の原則で、この大原則に反して経済の発展は企図せられるはずがない。

(参考: 渋沢栄一「論語と算盤」: 国書刊行会)